

《書評》

『ラフカディオ・ハーンの耳、語る女たち：声のざわめき』

西成彦*著、洛北出版、2024 年

長 志珠絵†

0.

いただいた際、少し凹凸のある、目を惹く赤地の薄紙に包まれていた本書を手にとり著者の本書への想いを想像した。ついでは装幀の洒脱さに、晴眼者である読者は目を奪われる。それぞれの章を区切る中扉も凝った意匠が施され、随所にハーンが生きた時代の視覚表象——例えばベアト撮影の写真、レガメやビゴー等による同時代の訪日「西洋人」によって残された大量の挿画、さらにはハーンによる訪日以前のスケッチ等が配され、「見る」ことの愉しみに溢れている。

頁を開くと、ハーンの移動・放浪する人生の軌跡が北半球中心の世界地図に落とし込まれている。異文化への理解というふるまいを、閉じた二者間に封じ込めない。ジェネリックな刷り込みに慣れた読者をまずは覚醒させる導入口である。

1.

① 本書は全体に、1990 年代後半以降、2020 年代にいたる「初出」を持ち、研究史整理や論考レビューにも目配りした大量の注記とともに、内容・分量ともに二分される。評者は前著の同時代の読者であったが、再度、著者のテキストによってラフカディオ・ハーンという移住者に出会い直し、著者が試みる読み直しの世界に誘われた。

前半、1993 年に出版された『ラフカディオ・ハーンの耳』をあえて生かした「ラフカディオ・ハーンの耳」は、序としての「文字の王国」から「大黒舞」「ざわめく本妙寺」「門づけ体験」「ハーメルンの笛吹き」「耳なし芳一考」までの全体に相当に増補・改訂を加えた 6 章で構成される。

前著の構成を保持した「ラフカディオ・ハーンの耳」の主題は、ハーンが見出した 19 世紀末日本の、急速に周辺化され、意味変換させられつつある人びとの生活世界の系譜とその配置をめぐる優れた文化史的考察だろう。焦点は、ハーンが到達した非文字の口承文芸の世界とそこにいたる思索の旅の、著者による道案内である。周縁化され、「雑音」とみなされた音楽のような音の世界を、さらにそこだけ切り取るのではなく、時に蟬のようなしわがれ声の語りで表現する土地の人びと、芸能者の「声」に耳を傾けるハーンとは誰か、何者か——への問いと解をめぐる豊富な仕掛けに満ちている。

* 立命館大学名誉教授

† 神戸大学大学院国際文化学研究科教授
s.osa@people.kobe-u.ac.jp

ところで幕末維新期は他者としての「日本人論」が、言説としても視覚表象においても豊富であり、すでに「近代」に馴致された私たちにとってもそれらはオリエンタリズムへの欲望を誘う。だがハーンが来日した19世紀末の日本は、オリエンタリストたちが愛でた幕末維新期の社会のすがたを急速に失いつつある過渡期でもある。ことに、ハーンが移動し、移住した在日14年の居住場所とは、旧城下町の松江を出発点に、日清戦争下の軍都熊本や首都東京など、明治の近代を背負う空間であった。彼は何を「見る」ことができたというのか。

しかし著者が丹念に拾い上げるハーンはさまざまな点で、19世紀的な訪日西洋人の「範型」としての「人」（「西洋人」「白人」「男性」かつ壮健な「健常者」）から距離がある。著者は、ハーンとは誰か、をそうした視座から丁寧にときほぐす。

頑丈な人ではなく、寒さに弱く冬嫌い。中等教育機関でも教鞭をとるが漢字も含め、日本語の習得を放棄し、視力にハンディキャップまで負っている。著者はこの逆説的な存在に思考の可能性を見出す。そもそも19世紀末、「西洋人」による世界漫遊が盛んな時代であってもハーンは並の「移動者」ではない。名前の由来にもなったギリシャ生まれのアイランド人で、英国でブッキッシュな教育を受け、19歳で米国南部のシンシナシティ、さらにニューオーリンズを経てニューヨークへ。その間、インド諸島マルチニークでクレオール民話を採集し、人びとの生活に密接に関わった呪術性の強い労働音楽を探究しようとするような、正統派の近代主義者とは異なる異文化への向き合い方を積み重ねた。ハーンの実験は、二項対立的にとらえがちな比較文化研究を、過渡期の世界史のステージに置き直す。実際、ハーンが生きた19世紀半ば以降は、「西洋」が「非西洋圏」を見出す安定した時代ではなく、旧秩序の解体と「近代」の抑圧が相互に交差し、影響関係を及ぼしあう。合衆国旧南部の解体、マルチニークでも奴隷制度の解体とともに、「近代」が大きく人びとの生活や伝統文化に抑圧的に覆いかぶさる。

そうした知見を養って来日したハーンを介して見えてくる「近代」は、非文字文化とそこに関わる身体性を猥雑で野蛮、雑音とみなす社会的規範の形成のさなかにある。日本の文明開化過程とは生活空間に響く三味線やそれを伴奏とする歌唱など市井の芸能一般を、五線譜に合わない「淫声」として貶め、非文明視して排除の対象としていく過程でもあり、人種主義的な目線を併せ持った衛生概念とも親和性を持ち、人びとの生活文化のあり方への切り分けや排除、不可視化と歩みを共にする。著者は、来日以前のハーンの実験、異文化との向き合い方を縦横に織り込みながら、来日後のハーンのテキストを「音響的な日本の登場」「下駄の硬質な響き」等、非文字文化の発見の痕跡として読み進める。来日後の14年間のさまざまな試みは「聴覚を介した作業」に集約されるものであり、日本文化の中で「口承文芸」が果たしてきた役割を見出したハーンは、「目よりも耳に、より大きな役割を課して、いわゆるフィールドワークの方法を日本研究に適用した」（8頁）。

② では著者にとって、ハーンとは誰か。来日後のハーンはすでに反・西洋的近代を知の基本とするが、衛生論や近代的教育等と伝統社会を劣位とみなす価値観への応答が具体的な人物を介して比較分析される。例えばアカデミズムとしての「国語」「日本語研究」に名を残す、チェンバレンやアストンとの差異は、「苦しむ民衆が狭苦しいゲッターのような空間に追い込まれ、ほとんど音なしの存在と化してしまうような衛生的な理想社会に比べて、豊かな雑音的伝統を残した文化の方に〔……〕根源的な何か」を感じる（117頁）身体的な感覚である。特権的な文字所有者の責務としての、正確な記録や保存という使命から自由で無責任なハーンの立ち位置が、逆説的に、越境的な創

作活動に勤しむ知的行為を可能にする姿を著者は浮かびあがらせる。

みすごされてきた論点をめぐる著者の優れた試みも多くあり、例えばハーンの松江でのフィールドワーク、大黒舞体験をめぐる考察は貴重な思索である。

松江郊外の被差別部落への訪問がいかに計算され計画的であったかという点とともに、ハーンも含め、チェンバレンやミットフォードなど、19世紀末の著名な「西洋人」日本研究者たちが、日本の被差別部落への関心を共有していた——なかでも社会階層としての「エタ」をそれぞれの著書に記述し、日本論として構成していた——という事実には率直に驚いた。一方で、ジプシー音楽にも興味を持っていたハーンの場合、その日本論はより分節化された形で音楽に向かい、ゲットー化された被差別集団の持つ、他とは異なる音楽的芸能性に強い関心を抱く。

被差別の問題に立ち入りながら、失われゆく文化的可能性に関心を集中させていく知的営為はハーンの限界か、思考の可能性なのか。そもそも「文化とは〔……〕おしなべて集団暗示にはかならない」（99頁）とする著者による、芸能の特殊性をめぐるジレンマを、読み手の側に投げる問題提起でもあるだろう。著者の、ハーンにとっての大黒舞体験という思考をたどる調査は、ハーンの人生に即してタイムスパンが長く、著者は改めて、ハーンがこれらを英国バラッドとの類似性につなげて敷衍していくこと、大黒舞を日本文芸の豊かな遺産のひとつとみなすことで、チェンバレンらアカデミズムの中心にいる日本研究者の偏りを補う営為と指摘してみせる。

同時代での、言及する対象や方法が近い知識人との比較という手法はほかにも、熊本にハンセン病の治療施設を作った宣教師ハンナ・リデルのような、ローカル文化に目配りをした人物をはじめ、森鷗外や柳田國男など射程は広い。特に柳田との比較である「口承文芸」との向き合い方について、ハーンの「身体感覚を通してつかみと」る、「いかなる雑音も聴き漏らさない」姿勢にその特徴を見出している（206頁）。「雑音」として次第に遠ざけられていく、移動する民の「口承文芸」への関心の射程は、テキストにとどまるものではなく、文字を介さない芸能者の記憶と即興による一過性の強い音楽としての複合的なものであり、文化的な喪失や周縁化が加速する「過渡期」を照らし出すものでもあるだろう。

そのほかハーンの実践への「読み」も、ハーンの本論の、生活者のな広がりとして印象的だ。本書ではハーンの「耳なし芳一」とともに「ハーメルンの笛吹き」を重要な作品として扱うが、テキスト原文を自身の教室の生徒に訳させたハーンは作文の訳文のずれから「日本的な論理を嗅ぎ取り」、学生による「再話」とみなすことで、「日本人ならではの固定観念」の材料として日本理解につなげた、と著者は読み解く（161頁）。

では同じエピソードや材料を異なる観点から考えるとして、セクシュアリティやジェンダーの射程は有効だろうか。例えば生徒たちは松江の旧制中学校であれ、熊本の五高であれ、全員男子学生だが、この点をどう考えるのか。あるいは、ハーンが聴き取った「雑音」の持ち主たちは、門づけの芸能者集団も含め、女性たちである。著者はこれらの出会いを「聴覚的な異性体験」と意味づけ（130頁）、ハーンのヘテロセクシュアリティを指摘している。しかしすべての論点を前半で論じ尽くす必要はない。これらはおそらくは著者が読み手に仕掛けたものなのだろう。後半パートではそれらへのアプローチが用意されているからだ。

2.

① 後半は4つのパートに分かれており、「ハーンと女たち」（「語る女の系譜」「『女の記憶』という

名の図書館』)、「ハーンと文字」(「文字所有者の優位から文字の優位へ」「盲者と文芸」)、「宿命の女」(「『おしどり』とマゾヒズム」)、「怪談 浦島太郎」)、「ハーンと世紀末」(「ラフカディオ・ハーンの世紀末」「ハーンを交えて議論してみたいこと」)からなる。

これらは全体に、ハーンという観察者・思索者がヘテロセクシャルな西洋人男性であることを方法として組み込みつつ、その主題は、前半で「簡単に言ってしまう三角関係の物語」(183頁)、「耳の物語」(185頁)とされ、作品分析の中核に置かれていた「耳なし芳一」論の21世紀に向けた展開が試みられる一方、ハーン評価としてのフェミニズム性への問いでもある。

② まず作品を通じた分析方法としては、前半パート「ハーンの耳」でも、ロラン・バルトの日本論をはじめ、ハーンの英知の系譜をつなぐ、系譜を掘り起こす試みがなされていた。同時代の信奉者をはじめ研究史、さらにはハーン自身が見落としてきた新たな論点を提起するものだろう。特に全体の主題でもある「耳なし芳一」の読み直しは、後半パートでは、晴眼者が自明のものとしてきた視覚性への介入が焦点化される。方法論をずらすことで、読みと意味づけは大きく変わることを読み手は繰り返し教えられる。

例えば前半パートでの作品分析を通じての芳一は、特権的文字所有者である和尚との関係性のなかでは疑似親子関係にあり、被庇護者としての存在である。一方、異界の女官や二位尼と想像される「老婆」の前での弾き語りでは、「男芳一」として琵琶法師としての技量の高さに加え、身体的男性性を誇示する存在として表現された。従順な身体と技量を備えたマッショナ身体は合わせ鏡である。これに対し、後半パートでの物語の読み解きは、俯瞰的な視座が用いられている。主人公は、和尚と異界の亡霊(「文盲者」)の媒介者としてそれぞれの「法」の間に置かれることで物理的にも引き裂かれた。著者はこれを「媒介者の身体物語」ととらえた。いいかえれば前半パートで二者の関係性のなかでジェンダー化されていた芳一は、後半では、三者の関係性のなかに置かれ、僧侶たちからは「毛筆による愛撫」を受け、「異界」の側からは身体の一部を奪われ、全体として「二重の忠誠を強いられ」る(291頁)。

さらに系譜論的な読みが加えられることで、「晴眼者」という語彙が冒頭から登場していたことの意図が明らかになる。演劇家のアントナン・アルトーによるハーンの「耳なし芳一」の翻案『哀れな楽師の驚異の冒険』は、光や闇を効果的に用いての「『文字所有者の優位』に死を宣告するべくして書かれたテキスト」であり(295頁)、異文化接触ではなく、あるいは「異界」との接触にとどまるものでもなく、晴眼者の盲者理解への貢献という、ハーンの営為についての新たな論点を見出してみせる。

③ だが、そもそも「芳一」的な物語世界は、どのような方法論的な要素や背景をともなって成立してきたのか。著者はセツの役割と存在を、ハーンへの批判をともなってとらえてみせる。

著者はまず、妻であるセツを視野に置いたハーン的生活世界では、「ハーンは男性の友人たちと女性の協力者のあいだにはっきりとした役割分担の一線を画していた」(241頁)としてその二重言語性と性別による役割分担を指摘する。学生たちへの講義や同僚との意思疎通、さらには息子の教育に用いる言語は英語であった。彼らは男性エリート集団とその予備軍であり、ヘテロ男性であるハーンの周囲はホモソーシャルかつ親密な関係に閉ざされる一方、妻であるセツは英語を知らない、介さない女であることを求められていたことになる。著者はさらに、「日本の女は日本の言葉で話した方が可愛い」とのハーンの残された発言に着目し、しかしここから逆に、ハーンのねじれた

フェミニスト性を見出す。この著者の試みは相当に力技だ。

ではどう解くか。まず合衆国時代を含め、親しい女性評を残したハーンはセツへの評価は残さない節度を持つ人物である。しかし著者が着目し参照する事実、クレオール文学の構成要素としての、奴隷制時代の口承文芸の担い手に対するハーンの向き合い方だ。反植民地主義的姿勢の強調が求められる文学的営為は、男性的系譜とその語りを優遇する一方、女性たちの経験や語りを低く置いた。その一方、西インド諸島の奴隷制下、マルチニークの人びとの、奴隷階級の女性たちの経験としての「女性の図書館」は、記憶の倉庫として重要であり、そこに気付いていたハーンは「オーラルな語りを支えてきた女たちの系譜に深い敬意を払いつづけた」（279 頁）と著者は強調する。文字文化としての男性文化から排除された女性集団の存在という構造こそが、「記憶の図書館」として、集団の経験や記憶の身体性を担保する役割を果たすという。

こうした枠組みに説得されつつ、しかし前半の問いと同様の、つまりゲッター化されたマイノリティの経験に誰がどう向き合うか、その重要性を認識し、さらには記述する（著者の言い方では「書き留める」）のは誰なのか、という課題は残り続けるように思う。

一方、日本でのハーンは、民話のほか、「非文字文化」の体现者とその世界を自らには欠けた世界として自覚し、「再話」ではなく「採話」としての方法論を大きく展開させた、先見性を持つ知識人であった、と評される。しかし同時に、そこには媒介者の身体的能力が介在していることも著者は見逃さない。英語を学ぶことから遠ざけられたセツは助手として、非文字文化を伝達・媒介する役割を求められ、結果、ハーンは、『文字文芸』の内側に『口承文芸』の香りを含みこませる複雑な技法を開拓し、「フランス文学の『翻訳』、すでに文字化された非文字文学の『再話』、非文字文学の『採話』」を融合させた、独自の技法を結実させるという（246 頁）。

インフォーマントを必要とする民俗学的調査を志す者にとって、かつ現地語を解さないハーンにとって、過渡期の日本でインフォーマントそのもの、もしくはその媒介者をつとめる存在は、新たな社会秩序として、「近代」がおしなべて導入した「二分された性」秩序による、劣勢のジェンダー化された存在の側だろう。

ハーンとは誰か。覇権的マスキュリニティという点で常に違和感や疎外感を抱く位置にある——という前半のハーン像は、ハーンという存在を成り立たせた 19 世紀末の男性ヘテロセクシュアル知識人性が同時に、どの集団にも属しがたい文化的領域の体现者としてのハーンの知的営みを説得的なものとし、あるいは開かれた可能性を持つものとして、新たな読みを可能にするものだろう。しかしここでも、著者が「このもうひとつの図書館の記憶を、男たちの図書館へと媒介する役割をすでに来日以前から果たしていた越境的な『フェミニスト』」（280 頁）とみるハーンの「媒介」的役割は、果たしてそれを「フェミニスト性」と考えてよいものだろうか。男たちの図書館の増強、正統派コレクションの部分的足し算にならない保証はないのではないか、という懸念が残る。

2019 年、東京大学の入学式での上野千鶴子氏の祝辞は話題を呼んだが、そのなかで上野氏は、女に求められる「かわいい」役割は、相手に脅威を与えない、競合しないことを意味する旨を述べていた。失われゆく口承文芸を書き留めるために用いられた、「閨房」^{けいぼう}も含めた明治の男性知識人と助手の関係の、ジェンダー化された関係性の評価はなかなか悩ましいことも記しておきたい。

最後に、わたくしごとながら評者は、アカデミズムの入り口でうろうろしていた 1993 年、出版されたばかりの『ラフカディオ・ハーンの耳』に出会い、国民国家批判を分節化した書として魅せ

られた。1990年代にかけ立命館大学の文学部周辺には言語文化研究所が立ち上がり、活発な研究会活動、文学・文化系の共同研究プロジェクトがいくつも展開していた。戦後の私立大学文学部の研究・教育実践として改めて強調、再認識すべき動向であり、立命館大学界限での20世紀末の知の研鑽の隅っこから見ると、シンポジウムや共同研究の成果の論集の出版など、西川長夫先生をはじめ、言語文化研究所の活動がまさに、人文学の学際性を具現化させ、流れを作っていた。そのなか、渡辺公三氏に続き、熊本大学から当の著者が『ハーンの耳』をひっさげ、立命館の教員として就任されたことになる。

そうした知の風景を想起したのは、本誌執筆要領の参照文献の範型に渡辺氏の文献を目にしたせいもあるが、本書が再版の域を超え、自著の再語りの可能性と醍醐味を、何よりも、問題を21世紀の人文社会科学に向けて開くことの可能性を示されたことによる。ハーンの方法として著者が注目した「再話文学」を本書もまた果敢に実践し、読者に未来に向けての「読み直し」を促したことに改めて感謝したい。